

ゼロコロナ政策下における深圳での生活

前深圳日本人学校教諭

愛知県江南市立古知野東小学校教諭 染井 紀子

キーワード：オンライン授業、待機期間、ゼロコロナ

赴任校の概要（2023年3月18日現在）

学校名・日本語：深圳日本人学校

学校名・英語表記：Shenzhen Japanese International School

URL：<http://www.jsszcn.com/>

1. はじめに

未知のウイルスによって世界的に移動が制限され、人々の生活が大きく変わり始めようとした時、中国に渡る機会を得た。しかし、他の派遣年次の方々が毎年渡航されるようにはいかなかった。先行き不透明な中、ようやく渡航ができたのは、2020年9月24日のチャーター機だった。待機期間を含め、ゼロコロナ政策下に3年間どっぷりとつかり、どのような学校生活を送っていたのかを紹介したい。

2. 渡航延期

(1) オンライン授業スタート

2020年3月末日、愛知県での勤務を終え、渡航に向けて実家に帰省した直後に1週間後の渡航延期が決まった。日本でも新型コロナウイルス感染症の患者数が毎日発表され、外出を控える動きが活発化していた時期だった。赴任先である、深圳日本人学校では4月の開校ができず、オンラインでの授業がスタートした。日本では、タブレット端末やインターネットの整備が進んでいない中、アジアのシリコンバレーと呼ばれる深圳の動きは素早かった。

5月に入り、深圳の子どもたちが登校を始めるのに合わせて、パワーポイントを利用した授業や、深圳の教室の先生方と役割を分担して、教室での児童の前での対面授業、並びにタブレットやカメラを用いて日本と繋ぐハイブリッド型の授業も行われた。

1年目は、私自身6年生の担任だったため、社会科の授業において関西地方の各地から中継授業を行った。授業の進捗に合わせて、法隆寺、唐招提寺、東大寺、正倉院、薬師寺、鹿苑寺金閣、慈照寺銀閣、本能寺跡など様々な場所と教室を繋いだ。中国生活が長く、日本の文化に触れる機会が少ない児童や保護者にもとても好評をいただいた。

専門の図画工作科では、水彩画の技術指導を中心に行った。下絵の段階では、児童が描いたものをよくするためには、どのようにすればよいのかをタブレット端末に描いて見せ、再構想の助言を行った。絵の具をのせていくと教室にいる先生がカメラを持って机間を回り、映し出された児童の作品に細かく助言した。さらに、完成に近づいてくると児童一人ひとりがカメラの前に来て、自分の絵を見せながらアドバイスをもらいに来た。絵の具の色使い、混ぜ方、濃度など口頭で伝えることがどれほど難しいかをこの時に気付かされた。それでも、児童たちの積極的な姿勢にオンラインでも実技指導ができると感じた。

(2) 日本での生活

私自身、渡航延期中は、オンライン授業、授業準備、会議への参加など、在宅ワークをしながら過ごしていたが、同期の中には、原籍校に出勤しながら深圳での授業を行っている者もいた。他国に派遣予定の同期には、昼間は原籍校で勤務し、時差を利用して21時や0時を超えてのオンライン授業を実施していることもあった。

実家と勤務地が離れていた私は、原籍校校長の配慮により、深圳日本人学校での勤務に集中することができた。それでも月一回は、状況報告や書類提出などに原籍校へ足を運んだ。ただ、このような状況は前例のないことであり、それぞれの県で対応が異なっていたため、その混乱が国会でも取り上げられることとなった。待機教員が400名を超えていることや、日本で先行き不透明な中、住宅補助がない中勤務している状態などが放送されていた。その後、待遇改善が行われ、7月より少しずつ渡航できる国が増えてきた。私たち深圳組も9月18日の17時頃に、9月25日に渡航するように連絡が届いた。しかし、PCR検査の陰性証明が9月25日から渡航の必須条件となることが中国政府から出されたため、急遽9月24日のチャーター機で、深圳ではなく広州に渡航することになった。

3. 隔離生活

(1) 隔離までの流れ

9月23日、大阪から名古屋まで車で行き、名古屋駅で車を売却し、そのまま新幹線にて東京へ向かった。前泊して、羽田から広州白雲国際空港へ着いた瞬間、空港職員すべてが防護服に身を包んでいた。それまで渡航できる嬉しさが心が弾んでいたが、乗客、クルー以外は防護服という異様な光景に一気に緊張感が走り、中国に来たという実感が沸いた。

飛行機から空港へは、座席ごとに降ろされ、番号のシールが衣服に付けられた。順番に移動して、鼻によるPCR検査が乗客一人ひとりに実施され、空港出口まで誘導された。そのままバスに乗せられ、1時間半ほど市内を移動して、隔離ホテルに着いた。前評判通り、ホテル前には防護服の人たちが待ち構え、すべての荷物に消毒液を噴射していた。慌ててバックパックに



広州白雲国際空港で防護服の人々

カバーをかぶせ、養生した。体も全身散布され、靴の裏も消毒するように命じられた。やっとホテルの中に入ると、ロビーは隔離される人でごった返していた。衛生局から派遣されたであろう、日本語が使える防護服のスタッフを捕まえながら、ホテルに入るためのアプリの登録、隔離ホテルの費用の支払いを終え、一人ひとりがホテルの部屋へ分かれて入った。いよいよ隔離生活の始まりである。

(2) 隔離の様子

私が入ったホテルはツインルームだった。仕事ができる小さな机と椅子、ソファも備え付けられていた。バスタブはなかったが、温度調節がしっかりとできるシャワー室がついていた。また、ペットボトルの水が部屋に1箱置いてあったが、冷蔵庫は電源を入れても稼働しなかった。しかし、申し分ない部屋であった。

隔離0日目は、同期が気を利かせて全員分の食事を各部屋に届けるようにフロントに頼んでくれたようだが、私は早々に眠ってしまい、朝になってドアに冷えた食事がかけられていたのに気づいた。

隔離中の食事は、3食とも部屋の前に置かれ、チャイムが鳴り、ドアを開けて取ることができたが、一歩

も部屋の外に出ることはできなかった。タオルの交換も必要な際はいつでもしてくれた。食事と同じように使用したものをビニールに入れ、ドアの外に出しておくで回収していつてくれた。ゴミ出しの際も同じだった。シーツの交換も連絡すれば、新しいものをドアの前に置いてくれるが、非接触だった。人と接するのは、防護服の人が1日1回部屋に来てする検温とPCR検査のみであった。ドアを開け放していると部屋の電話が鳴り、閉めるように連絡がきた。こんなにも人と接しないことは苦しいのだと実感したが、オンラインでの仕事やビデオチャット、内線を使って友達や同期と連絡できたことがとても気分転換となった。

(3) 隔離中の食事

隔離生活における唯一の楽しみは食事だった。最初はシステムが分からず、1日目は言われるがままに料金を支払った。もちろん中国式の食事のため、1食分がかなりのボリュームで部活動の高校生ぐらいしか食べきれそうになかった。3食で2000円ほどであったが、隔離メニューではなく、ホテルのレストランに直接頼むようにすると、食費もボリュームも抑えることができ、さらに好きなものを選ぶことができた。その時も同期と食事メニューについて情報交換をするのも楽しいひと時であった。加えて深圳にいる先生方や中国に住む友人が遠隔でデリバリーをしてくれ、外からの食事も味わうことができた。隔離政策も始まってすぐだったため、情報があまりなく不安しかなかったが、同期と楽しみながら創意工夫により全員で無事2週間を乗り切ることができた。

4. 学校生活

(1) 1年目

渡航延期が半年あったため、子どもたちと実際に会って対面授業を開始したのは、後期が始まる10月からだった。本来なら2クラスでスタートするはずの6年生は1クラスにたたまれており、後期からもクラスを分けることはせずに、私が副担任として授業を担当したり、深圳に戻ってくる児童に補習授業を行ったりした。日本に一時帰国していた児童生徒が深圳に戻ってくるためには、私たちと同じように隔離を経てからではないと入国できない。また、コロナ陽性者が確認されるとマンションが封鎖される事態が断続的に続いたため、対面授業とオンライン授業の併用型、ハイブリッド授業を継続して行っていた。しかし、隔離政策が安定してくると、日本のように外出を控える動きや、人数制限がある食事会などの動きもなく、普段と変わらない日常を送ることができた。

ただ、不定期に「3日以内に全市民がPCR検査受検のこと」という知らせが届き、その都度PCR場を探して受検した。運動会や修学旅行など、対外的な行事は中止にはなったが、学習発表会や卒業式は制限があったものの、校内の対面で実施することができた。

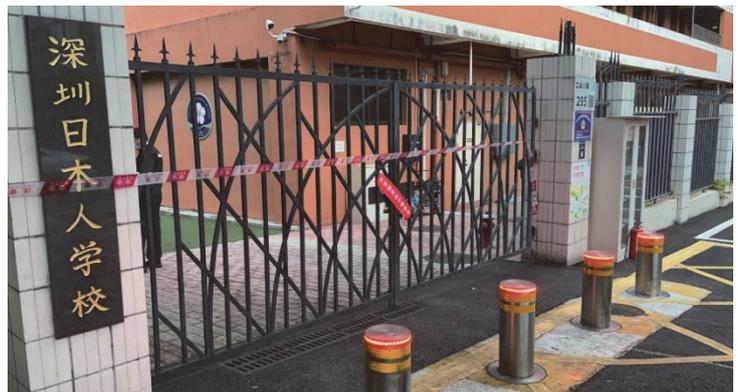
(2) 2年目

2021年年度は、私たちに引き続き新着任者の隔離措置はあったものの、予定通り学級をスタートすることができた。深圳日本人学校の運動会は、例年5月に市の体育館を借りて行われるが、人数制限もなく例年通りに開催できた。7月に行われる予定であった修学旅行は、延期、行先変更を余儀なくされたが、実施することができた。私は、5年生の担任として、宿泊体験学習を何としても成功させたいと強い思いがあった。その思いとは裏腹に、最初の宿泊施設との打ち合わせが、施設の従業員にコロナ陽性者が出たため延期を余儀なくされた。8月末に施設見学、打ち合わせに行く際には、道路で行動履歴の確認があり、深圳外へ出た職員が足止めを余儀なくされた。ゼロコロナ政策の1つとして、行動履歴が記録されたQRコードがあり、どこへ行く際にもそのQRコードを機械に読み込ませないと建物に入れなかったり、乗り物に乗れなかったりした。これは、2022年12月頃まで続いた。しかし、宿泊体験学習は、世界有数の貿易港である塩田港を見学できなかったものの、それ以外は予定通りに実施できた。中でも深圳日本人学校初のキャンプフ

アイアーは、子どもたちにとって最大の思い出となった。コロナ政策も2年目に入ったが、制限がある中でも12月までは落ち着いていろいろな行事ができた。状況が一変したのは、1月に入ってからだった。現地校がオンライン授業に切り替わり、PCRの受検をするように何度も指示が出て、1月末から本校もオンライン授業となった。3月には深圳市が66人の陽性者が確認されたのをきっかけにロックダウンとなり、地下鉄、バスなどの営業も停止した。オンライン授業を継続したまま、子どもたちと対面することなく修了式を迎え、1年を締めくくった。

(3) 3年目

2022年度は、PCRの1年であった。1~2月は、3日以内の陰性証明だったのが、3月に入り毎日の受検が義務付けられた。街のあちこちで無料のPCR受検場ができ、コンビニに立ち寄る感覚で毎日受検した。学校は新年度から開校できず、オンライン授業は継続していた。衛生局の立ち合い検査の元、遅れはしたものの4月末日より開校許可が出て、子どもたちのにぎやかな声が学校に戻ってきた。しかし、毎朝のPCRの受検確認が厳しく実施された。出勤して最初にクラスの児童のPCR受検有無確認のQRコードを確認しなければならず、提出していない児童には電話で提出をお願いするというのが日課となった。提出されずに登校してきた児童生徒は、すぐに教員全員に情報が共有され、提出が確認できるまで、校舎内に立ち入ることができなかった。また、未受検者は学校どころかどこにも行くことができないため、例え学校を休んでいたとしてもPCR検査を受けるため外出するという毎日だった。PCR検査はそのうち、学校で実施されることになり、子どもたちは、授業の合間に決められた時間に受検した。そのような状況下で、運動会や水泳学習は軒並み中止となったが、平常の授業は対面で続けることができた。



封鎖された直後の学校。この後バリケードがはられた。

しかし、8月29日早朝に出勤をすると、突然衛生局の職員と出くわした。私が校門に到着すると同時に、突然学校を封鎖し始めた。どうして学校を封鎖するのかと聞くと、「学校関係者」「コロナ陽性」ということだけ聞き取れた。すぐ管理職の先生方に一報を入れ指示を仰いだら、日本のように事前に学校関係者に知らされることはなく、管理職の先生方も一様に驚き、とにかく自宅に戻るよう促された。

ふと見ると職員室に電気が付いていた。警備員に確認すると、1名先生が出勤されているとのことだった。急いで中に連絡を入れると、出勤されていた先生はもちろん封鎖されたことは知らなかった。封鎖をされると中からも出られず、外からも入れない状態が続く。いつ解放されるかも分からない。すぐに管理職に連絡するように伝え、学校を後にした。

それから、全職員、全生徒・児童、家族も含めて外出禁止となり、住居のドアを封印され、3日間自宅から一歩も出ることができなかった。隔離生活の再来である。そんな中でももちろんPCR検査は実施された。自室から出られないため、入国時の隔離生活と同じく部屋に検体を採取に来てくれた。3日間連続で陰性が確認できたら、戸外へ出ることができた。しかし、濃厚接触者とされる数名の職員は、防護服を着て隔離施設へ移送され、より厳しい隔離生活を余儀なくされた。また、校内に取り残された職員は、日付が変わる前にPCR検査での陰性が確認され、帰宅の後、同じく3日間の隔離生活へと入った。隔離措置後は、再開校許可が出るまでオンライン授業が行われ、数週間後に対面授業に戻った。

そんなPCR生活も突然終わりを迎えることとなる。「もうPCRを受けなくてもいいらしい」という情報が回ってきたのが12月上旬であった。まことに信じがたく、週末は町のPCR検査場に通っていたが、検査場でも検査していなかったり、検査時間も縮小されていたりすることに気付いた。その流れで学校でのPCR検査も実施されなくなったが、私の2022年度のPCR検査受検回数は297回にも上った。

5. おわりに

日本でも話題となったゼロコロナ政策であったが、厳しい環境下でありながらも創意工夫しながら教育活動を続けることができた。また、当たり前が当たり前でなくなった時こそ、真価が問われると実感した。深圳スピードと例えられ、常に進化を続ける深圳の街のように自己研鑽に努めながら、子どもたちにとってよりよい実践を今後も模索していきたい。